

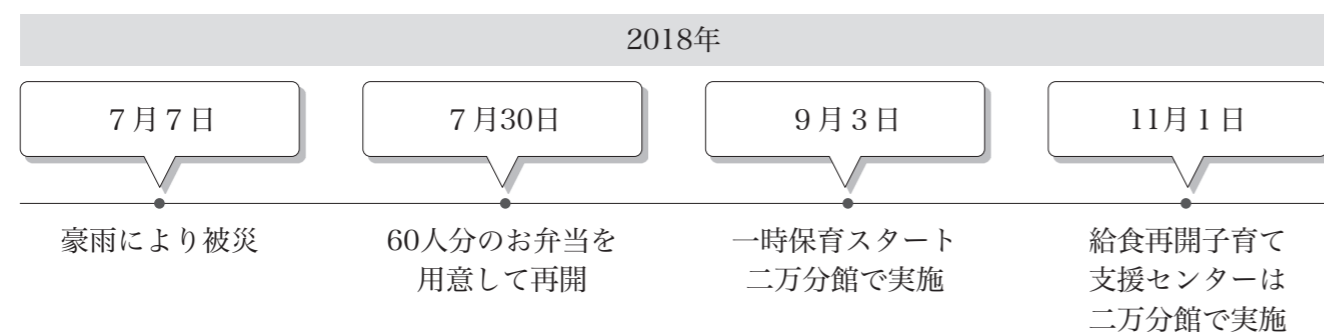
な被災地の支援活動をしている時、保育園に食品提供の申し出をすると、『うちの保育園にアレルギーの子が〇人います。でも公立なので市に確認しないと物資を受けていいのかわかりません。とりあえず断ります。』と言われたことが何度もある」と聞きました。「真備かなりや保育園では快く物資を受け入れてくれたので感謝しています」と言われました。

この地域では真備かなりや保育園以外はすべて公立なので、公立はやりにくそうだなと見ていて感じることは確かにありました。私たちは、現場の意見を出し合って良いと思うことは取り入れて実行することができました。公立だと現場判断が難しいこともあるでしょうし、確認事項などがあらかじめ決められていたりして大変なことがたくさんあったのではないかと思います。現場の人の感覚と管理する立場の人の感覚も違うでしょうから、緊急時のときはもどかしいこともあったのではないのでしょうか。間接的にそういったことを耳にし

た時は、現場はしんどかったらうなと感じました。

ですから、他の被災地支援の時のお話を聞いて、立場上物資受け入れを断らなければいけなかった保育園の苦しい気持ちはなんとなく想像できます。私立と公立の立場の違いは、被災地域となっても変わるものではなかったということですね。つらいところです。

真備かなりや保育園の保育士たちはみんなが明るかったと思います。自宅も被災した保育士がたくさんいたので、保護者と保育士が同じ気持ちで話ができたらいいかもしれません。炊き出しがどこそこであるらしいとか、何かがないからどこかに繋いで解決しようという人がいたり、一緒になって話し合ったり、助け合うことができたので一緒に乗り越えてきたという実感があります。弱音を吐くことなくがんばってこれたことが強みになっていると感じます。先生たちは明るいよね、とよく言われますが、明るくないとやってられないというのも本音です。



### 〈資料3〉

災害  
コラム

#### 食物アレルギーの子どものための防災

食物、水、常備薬、靴下、防寒着、などの一般的な備蓄の他に、食物アレルギーの子供たちにぜひともやってほしい「災害対策」があります。

- ① 子ども自身が自分のアレルギーを言うことができること
- ② 塩むすび、ゆでた野菜、ふかしイモなど、最低限これなら食べられるというシンプルな食べ物をいくつか説明できること（アレルギーによって異なります）
- ③ 食品表示の見方を覚えること、それでも判断がつかないもの（例えばレシチンは何の由来か、植物蛋白と書いてあるのはグルテンかどうかなど）は「わからないので食べない」と言えること

左記の3点はいずれも、子どもが独りぼっちで家族とはぐれてしまったときの対策を想定しています。

災害が発生した時、食糧提供や炊き出しをする人の多くは一般市民のボランティアです。いくつかの災害支援を経験して分かったことは、ボランティアの多くは「アレルギー」を聞いたとしても、食物アレルギーであるその人が「何なら食べることができるのか」想像できないことでした。「助けてあげたいけれど、危ないから作ってあげられない」といった状況に直面した時に「〇〇なら食べることができる」というシンプルで誰もが知っている食べ物の情報は非常に有用でした。

NPO法人 アトピッ子地球の子ネットワーク

(食物アレルギー共同食品カタログ掲載コラムより)

### 〈資料4〉

災害  
コラム

#### ローリングストック法

九州には大きな地震はないと思われていましたが、平成28年熊本地震では大きな被害が発生しました。被災者は余震が続くなか避難所に向かいましたが、電気、水道、ガスといったライフラインは停止し、道路の損壊や渋滞のために物流は滞り、買い物もできず宅配も届かない状況で避難生活を強いられました。これまでは、避難生活には非常食といわれる食品の備蓄と救援物資で対応という考え方がありましたが、熊本地震では行政備蓄は少なく、救援物資は渋滞で大幅に遅延し、避難者の期待に応えることは難しかったようです。日本は自然災害多発時代に入ったといわれ、備えは不可欠となっています。特に普段の食生活で特別な配慮が必要な場合は、災害後も同様な配慮は重要です。乳幼児、アレルギー疾患を持つ児童、疾病患者、介護が必要な高齢者なども被災するため、食問題は健康面の二次災害につながる恐れがあります。これまで災害時には非常食と考え、賞味期間が長い食品以外は災害対策とならないと感じる場合も多かったようです。しかし、常温で保管できる食品であれば、賞味期間の長さに関わらず被災時は役立ちます。具体的な備えの対策としては、普段生活で時々利用し、食べ

たら補充しておくローリングストックという対策が役立ちます。この方法では、家族一人ひとりが必要とする食品を普段でも災害時にも食べることができます。また、普段の生活で食べる頻度が高ければ賞味期間が短くても大丈夫です。日本災害食学会の災害食認証制度では賞味期間は6ヶ月以上としています。これまでの非常食も含まれますが、賞味期間が6ヶ月でも1年の商品でも自宅にあれば役立ちます。問題は賞味期間の長さよりも、食べるために必要な飲料水やお湯を作ることが重要です。具体的には、被災時に普段から利用している常温で保管できる食品のほかに、ペットボトルの水やカセットコンロ、ボンベといった熱源が大切です。お湯があれば食べることができる食品の種類は大きく広げることができます。もちろん、食品も水もボンベも普段の生活で使用し、買い置きが被災生活を支えるだけの量があることが大切です。

避難生活の長期化が想定され、備蓄する量は3日分から一週間分へと推奨量は増えています。ローリングストックは備えが無駄にならず、災害時に役立てることができるため、災害に強い生活に変えることができます。

日本災害食学会 別府 茂  
<http://www.mmjp.or.jp/TELEPAC/d-food/>

(食物アレルギー共同食品カタログ掲載コラムより)



河川被災カ所位置図

## 二次避難所となった船穂公民館

倉敷市文化産業局商工労働部商工課  
堀内裕介さん

### 避難所を統括する立場から見た食物アレルギー対応

災害が発生したのが7月7日でした。夏休みに入る前だったので各地区の小学校の体育館を避難所として開設しました。そして2学期が始まるタイミングをひとつのターニングポイントとして避難所の集約が始まり、高梁川の西側では船穂公民館を集約場所として避難所を新たに開設しました。そして平成30年11月までに船穂公民館を含むほとんどの避難所を閉鎖しました。民間のみならず仮設住宅や、公共の仮設住宅が整備されていき、みなさんの引っ越しのタイミングを見ながらその時期になりました。

本題のアレルギーや食べ物に関する認識は、発災当時からいうと、ほとんど配慮が及ばなかったといっても過言ではないと思っています。

まずは食べ物や水、お茶があり非常食があり、最低限のところを確保するところからはじまって、そこが満たされるようになると、その次の段階で、おにぎりとかパンとか、お弁当とかステップアップをしていく中で、アレルギーを含めた個々の抱える問題になかなか対応できなかったのが正直なところ。アレルギーは発症したり命に関わることもあるので別かもしれませんが、個人のニーズをそれぞれ満たしていくことは、避難所生活のなかで不平等を生むのでは？といった考えもありました。食事を例に出すと、唐揚げが食べたいと言われている方が10人中6人いる、その場合は唐揚げを提供するのか。公費という国民の税金を介して提供されているお弁当は、言わば皆さんからの善意の支援であり、私は魚が食べたい、唐揚げが食べたいという個人の要望を満たすようには



倉敷市文化産業局商工労働部商工課堀内裕介さん



二次避難所となった公民館に届けたアレルギー用食品の一部、他の避難者にも食べてもらった

なっていないんじゃないか、といういろいろな話が出たのは事実です。

希望や要望というより、その一手手前にあるアレルギー、入れ歯、補聴器、眼鏡などの実生活をこなす上で影響が出る部分は、実際に避難された方と話していくうえで実態が見えてくるので個別対応をするしかないと考えていました。実際に補聴器や眼鏡がなくて困った人のためには、倉敷市内の眼鏡店を探して個別に無償提供や安価提供の協力を要請しました。

### 避難所での食事や暮らしぶり

二次避難所となった船穂公民館には、70名くらいの人が避難していたと思います。当時は、毎日避難所状況を日々記録し、医療関係チームなどを含め支援側で情報を共有していました。

二次避難所に避難していたのは高齢者、単身者、が多かったと思います。食物アレルギーがあつて、アトピック地球の子ネットワークの支援対象となっていたAさんのように、小さいお子さんを連れて避難している方は少数でした。船穂公民館では全部で5世帯いたと記憶しています。中高生がいる家庭やペットも一緒の家庭もあり、部屋を分けるなどの配慮をしていました。

避難所の食事のことが話題になると、必ずと言っていいほど野菜不足のことが出てきます。でも私たちにとっては食中毒を出さないことも重要です。そのため提供する食事は火を通してあるものであることが基本です。ですからサラダなどの生野菜の提供はお断りしていました。保健所の許可をとって生の野菜や果物を提供する方法もあるでしょうが、手続きが大変なら炊き出しはやめませうという人もいます。野菜や果物を提供してほしいという要望は多かったけれど思った通りには行かず、地元の方たちに工夫をしていただいて、根菜がたくさん入っている豚汁を出してもらったりしました。

避難所を行政が運営していて、管理が行き届かなくてインフルエンザが蔓延したとか、食中毒が

発生した、となると避難所での生活を継続できなくなるほか、世論的に強い批判が起り、メディア等に避難者の方々の生活が曝されることにもなりかねません。なので、管理運営に細心の注意を払うことがどうしても優先事項になってしまいます。

炊き出しはその場で調理、もしくは調理してから何分以内に運んでくる、などの条件を事前に確認したものについてOKしていました。調理場は小学校の給食室や公民館の調理場を利用するケースもあったので、調理のときも衛生管理のためのルールを守ってもらって食事提供していただきました。

お弁当と炊き出しの比率は時期によって変化していきました。小学校が避難所だったころは、夕食の炊き出しも昼食の炊き出しも、当初は地域の方がずっと続けてくれていました。その後徐々に資金的な課題が出てきました。地元の炊き出しボランティアに対しては、負担を小さくするように資金援助を受けられるように手続きをしたり、いろんな工夫をしました。でも、毎日の食事を作る現場を回す人たちの負担も強くなってきて、途中でお昼の炊き出しだけにして、夜の食事提供はなくなっていきました。その代わり夜は民間のうどん屋さんや、企業さんに来ていただきお弁当や調理をして提供してくれました。週1回から、多いときは数回ありました。

当初、お弁当がなかったのが、地域の皆さんによる炊き出し支援が始まって、そこからお弁当が支給されるようになると炊き出しの回数を縮小してお弁当に頼れるところはお弁当に、となっていました。

公民館の避難所を開設する時、船穂小学校に避難していた人はみんな船穂公民館に移動し、いくつかの小学校にあった避難所からも人が移動してきました。Aさんの記憶では、船穂公民館では、朝、昼、晩は主にお弁当に変わって、炊き出しがあるときは「この日にあります」と職員が声掛けをしたようです。

## 食物アレルギーの人への対応

避難所としては特に食物アレルギー対応はしていなかったため、Aさんは保健師さん経由でアトピッ子地球の子ネットワークと連絡を取り、それからうまく荷受けしてくれるようになったと思います。Aさんの持前の明るさでなんとかあったのですが、他の避難者の中には、それぞれの家庭による事情から周りの人とうまく連携がとれなかったようでした。実のところ、食物アレルギーの人が職員や医療系スタッフとのコミュニケーションの中でどれくらい拾えていたの分かりません。人によっては遠慮して言わない方もいたかもしれません。公民館には避難している人達で共有する冷蔵庫があったのですが、アトピッ子地球の子ネットワークから少し多めに送られてきたものを保管するため、Aさんは周りの人と調整して置き場を確保するなど、やりくりしていることは知っていました。

最近の経験ですが、台風19号の被災地支援のために、船穂公民館で対応していた2人の倉敷市職員が長野県へ支援に行きました。どの部門に支援に入ったか、私は詳細を伺っていないのですが、当該職員が報告会議で「走り出しの倉敷市を見ているようだった」と言っていました。災害支援は、行政職員として当たり前のことかもしれないけれど日常業務とは異なるものです。その時の支援活動は一生懸命だったかもしれないけれど、そこで得た経験を、日常の自分がいる地域にうまくフィードバックできていないような気がします。他の被災地域の事例もあり、経験豊富な様々な支援団体もあって、支援実態としてはうまく回っているけれど、被災した自治体は他の自治体の経験はあまり活かさないまま、ともするといくつかの現場ではゼロスタートではじめようとしているのではないかという感想を応援に駆け付けた2人の職員は持ったようでした。

今回、取材依頼のメールをいただいて当時の様子を振り返ってみました。医療的なチームは、すべての避難所、避難所から移動した先の仮設住宅

などの見回りをずっとしてきました。私自身は船穂小学校の避難所の責任者をして、その後いくつかの避難所が統合されて二次避難所となった船穂公民館の避難所責任者を担当しました。その当時は医療チームとも情報共有をしていました。アナログでしたがノートを作って、保健師や看護師資格を持った方が巡回するなかで、〇〇さんは高齢で飲みこむのが難しそう、〇〇さんは高血圧だというようなことを記録していました。市の職員もそれを見て「気にかけて声をかけよう」とか「何かあったときにはここに連絡しよう」といった細かい準備ができました。そういった課題の中にアレルギーのこともあったし、食物アレルギーの人が食べられる食物を提供してくれる団体がある、などといった情報を医師や団体ともっと早い段階から連携して、他の避難所などにも情報を広げるようなことができたらよかったです。反省点のひとつです。

地域の拠点となる避難所は受け持っていました。他の避難所の状況がどうなっていたか、詳細はわかりません。もちろん避難所のリーダー会議は週に1回、安定期になると2週間に1回、情報共有の会議はありました。そこでは他の避難所でどういうことが起こっているか、解決方法は何かといった共有はやっていました。でも健康管理の分野のことは共有した記憶がありません。食物アレルギーは命に関わる大切な問題なので、医療チームと一緒に情報共有ができればもっとスムーズに対応できたのではないかと考えています。

## 支援物資を届ける時の問題点、次の災害への備え

アレルギー用の食物を届けると連絡したら、断られた例があるという話を聞きました。例えば当時の自分の場合で説明すると、私は係長クラスで避難所の責任者を担いましたが、出来事によって意思決定ができる場合とできない場合があるのではないかと思います。例えば、当時もし避難所に直接アトピッ子地球の子ネットワークから食材料

が届いたら、私の感覚としてはもちろん受け入れていいものだと思いますけれど、責任の範囲を気にする人だったら自分が判断していいのかどうかためらってしまうこともあるのではないのでしょうか。

当時悩んだことで覚えているのはパチンコ店が「店舗改修しました。、無料ですので、みなさん遊びに来てください」というチラシを作って持ってきました。それは配布していいかどうか悩みました。他にも宗教関係や訪問販売のようなお金がかかるようなお話は丁寧に断りした記憶があります。

基本、皆さんの善意の支援は悩むより受け入れればいいと思います。スピーディーな対応ができるかどうかは、避難所の運営をしている人次第なところはあります。ただ、特定の人にはたくさん食材が届いて他の人には何もないというようなことがあると決めかねます。「まんべんなく」とか「平等に」というような変な癖かもしれないけれど、気にするポイントがあると思います。でも、倉敷市の場合は比較的裁量の範囲が広がったように思います。避難所統括リーダーのような立場の人がいて、決定権を与えたからどうぞと言われたわけではないのですが、いいと思ったことをどんどん取り入れればいいという共通認識があって運営できました。

食物アレルギーがあったAさんのケースもそうでした。アトピッ子地球の子ネットワークからAさん宛に少し多めの食材が避難所に届くことになって、「Aさんやっただじゃん」と声がけしましたし、これで避難所に合った課題が1個解決できたと思いました。しかも無償で持ってきてくれてありがたい話でした。

当時は「あとからお金の請求がきたらどうしようかな」とちょっとだけ思っていました(笑)。避難所運営の立場では無償の物資提供をしてくれる団体をまったく曇りなく最初から信頼したかという嘘になります。基本的には疑うことも必要です。被災して色々なことがいっぺんに動いている

ような状況だと、宗教から押し売りからいろんなところが来ます。家のリフォームも玉石混交でいろんなところが来ました。最初は「ええのええの」「ただですよ」みたいな感じで近づいてきてそこから搾取するみたいなことがあると聞いていました。アトピッ子地球の子ネットワークさんに関しても、基本的にはどういう活動をされているのか、どんな団体かということは調べて大丈夫そうだったので受け入れました。

当時は情報が遮断される一方で情報過多。欲しい情報は無いのに、必要ではない情報は山のように入ってくるような状況で収集がつかなかったと思います。そんな状況だったので、被災してすぐの7月初旬に「こういう支援があります」といった情報をもらっても埋もれてしまった可能性は高



仮設住宅として使用されたトレーラーハウス



二次避難所となった公民館に居住スペースとして設置された段ボールベッド

いです。一番効果が高いと思うのは、現地に足を運んでもらうこと。その場に直接案内しにいくとか、下から上にあげてもらおうといった方法がいいのかなと思います。上から降りてくるのを待っていると、行政のことを悪くいうつもりはないが、緊急を要するときは時間がかかりすぎる可能性が高いと思います。「待っているくらいなら自分で動いたほうが早い」ということで、倉敷市はたまたま現場力が発揮できたのではないのでしょうか。

### 個別ニーズへの対応

7月7日の水害発生以来から9月頃まではみんなにストレスがたまっていました。言い合いも発生していました。みなさんギリギリのところまで日々過ごされていたと思います。小学校から船穂公民館に移ってからは、広いところに全員がいた状態から小さい会議室を活用した部屋ごとの振り分けができました。お子さんがいらっしゃる家族、要配慮の人がいる家族、その他の3つくらいのカテゴリーで部屋分けをしました。要配慮の重度の方が2名いらして、1階のトイレのそばに部屋を決めたりしました。

小学校体育館が避難所だったときは、ワンフロアだったので、僕らの目が常に行き届くというメ

リットがありました。公民館になるとフロアも複数階にまたがるし部屋も分かれさらにカーテンで仕切れるようになると、中の様子が分からなくなってしまいます。もちろんプライバシーを守れるようになるのでいいことでもあるのですが、一方で私たちの目が行き届かなくなるので課題が増えたこともあります。孤独死のような事案がなかったからよかったけれど、極端なことを言えばそういうことが起こってもわからないくらい、多くの人のプライバシーを守りながら全員の様子をつぶさに知ることは大変でした。

行政職員として私は、全体の配慮のために全員に頻繁に声掛けするようにしていました。複数の方が同じ場所で生活し人それぞれ違いがあるので、24時間ほぼつききりでした。もちろん当番制で夜入る職員がいましたが、「〇〇さんの体調が悪そうだ。どうしよう。」という連絡が来ると、自宅から公民館に戻って救急車を呼ぶかどうか判断するというような対応をずっとやっていました。

避難所運営に関わる経験やノウハウは、倉敷市として蓄積されたと思います。書類にはなっていないかもしれませんが、避難所が閉じられた後に、二次避難所となった公民館での出来事を日々記したノートは倉敷市に提出しました。市議会でも一



真備地域被災者アンケート謝礼として届けた「救急箱」／水害によって手元がないので困っているというお母さんの声にこたえて



真備地域被災者アンケート謝礼として届けた「リゾット」／アレルギーの人でも食べられる災害備蓄用に作られた食品だが、一般の高齢者からの要望が多かった

過性のものでなく今回の経験をどうやって活用していくのか、という質問が出ていました。万が一また災害がおきたとしても、ゼロベースで復旧復興がスタートすることはないと思いますが、残念ながら今の段階で「経験の記録」のようなものをどうぞとお見せできるようなものはまだできていません。

今回、多くの方に支えられて災害対応を行う事ができました。次の災害や他の地域での被災地支援に今度は私たちの経験を活かせるようにしていきたいと考えています。



仮設住宅となったトレーラーハウス

### 〈資料5〉

西日本豪雨・食物アレルギー患者用食品群				
2018年	非加熱	変化希望	野菜不足	加熱
8月	コーンスープ レトルトカレー ふりかけ <small>そのまま</small>	ミートソース コーンスープ <small>そのまま</small>		
9月	お菓子	ランチボックス (さつま芋甘露煮) コーンスープ <small>電子レンジ</small>	野菜ジュース 保育園給食支援 牛乳 <small>そのまま</small>	
10月	お菓子	ランチボックス (さつま芋甘露煮) コーンスープ レトルト <small>電子レンジ</small>	野菜ジュース 野菜入りリゾット (3種類) 保育園給食支援 牛乳 <small>そのまま</small>	<small>離乳食兼ねる</small> <small>そのまま</small>
11月		<small>離乳食兼ねる</small>	野菜ジュース 野菜入りリゾット (3種類) 保育園給食支援 <small>そのまま</small>	カレー シチュー ハヤシライス ビーフン <small>調理場未完</small>

▶ 1

NPO法人アトピッツ地球の子ネットワーク

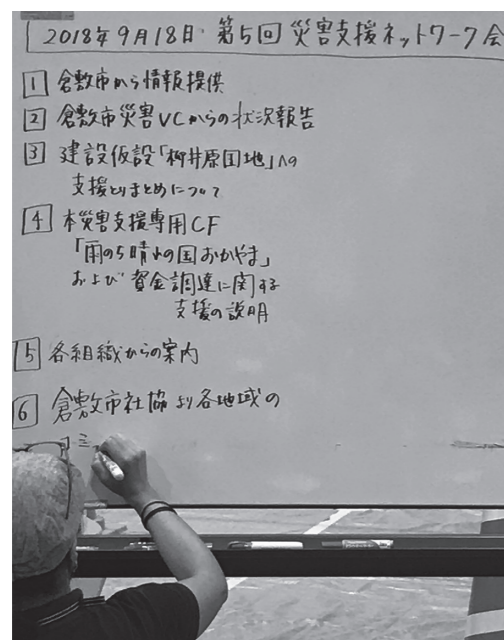
避難所・二次避難所にいた食物アレルギーの人へ届けた食品群



道路状況、航空写真など  
(倉敷市災害ボランティアセンターにて)



支援活動に入っている様々な団体・組織が  
情報共有するミーティングの様子  
(倉敷市災害ボランティアセンターにて)



会議進行する詩叶さん

## 災害支援ネットワーク おかやま

災害支援ネットワークおかやまは、平成30年7月豪雨で岡山県内での災害発生を受け、岡山NPOセンターと岡山県社会福祉協議会で設立、県と協力し情報共有会議を立ち上げ。同年10月に岡山県と日本赤十字社も評議員として加わり、民官連携の常設のネットワークとして再設立。https://saigainetokayama.org/

アトピZZ地球の子ネットワークは、8月から被災した人と連絡を取り始め、9月に「情報共有会議」に参加しました。お話を聞いたのは、岡山NPOセンターの石原さん、倉敷市社会福祉協議会の日野林さん。当時は支援から取りこぼされた患者がいないか、避難者の状況を誰がどのように聞き取っているのかなど、気になることをお聞きしました。その後は相談する先が保健師さん、保育園の園長先生に代わり、連携先が子育て支援センターになったことから、地域で支援活動をする方々の連携会議に参加する機会はなくなりました。現在の地域支援連携について、改めてお聞きするために、まびシェアを訪問しました。



まびシェア外観

## 災害支援ネットワーク おかやま まび復興ボランティア団体・NPOシェアオフィス (通称：まびシェア)

災害支援ネットワークおかやま事務局  
岡山NPOセンター 地域連携センター  
主任アドバイザー 詩叶純子さん  
災害支援ネットワークおかやま事務局  
岡山NPOセンター 地域連携センター  
アドバイザー(取材当時) 永田愛さん

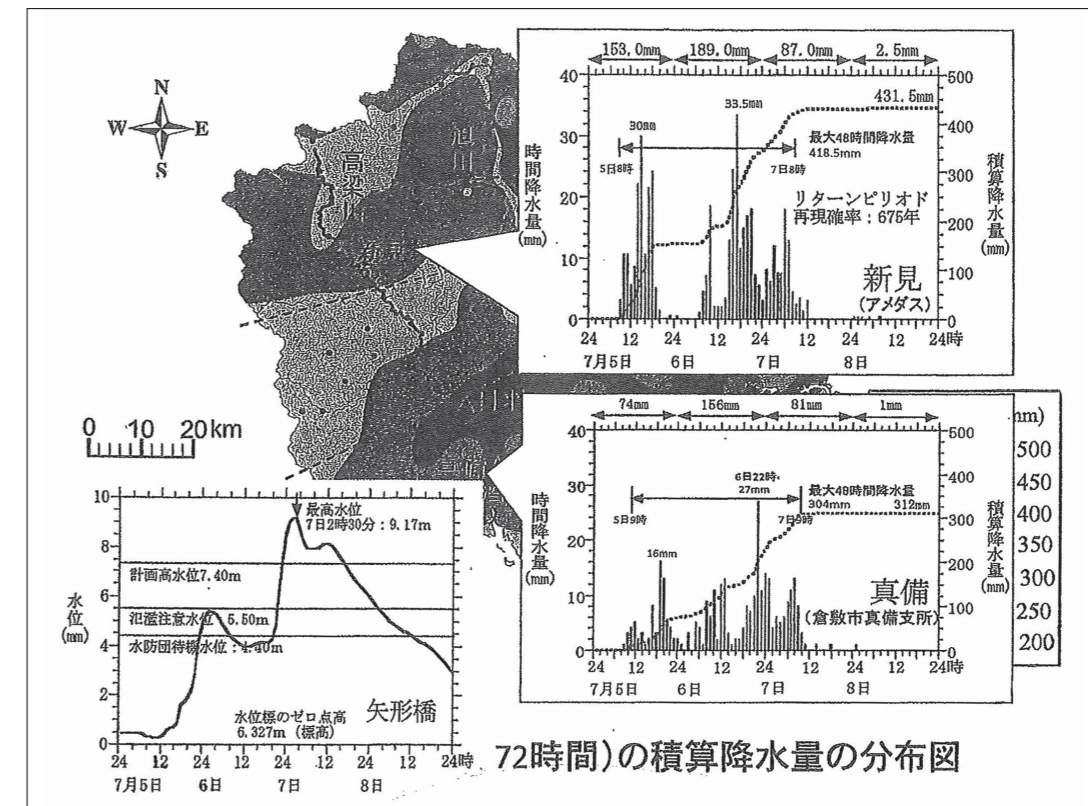
### まびシェア開設の経緯

発災直後から、災害支援ネットワークおかやまの事務局を務める岡山NPOセンターは、災害ボランティアセンター内に職員を3名派遣し、情報

発信やICT導入支援を進めると共に、被災者生活支援班(通称シーズ班)を立ち上げ、ピースボート災害支援センターと、おかやまコープ、倉敷市社会福祉協議会の生活支援コーディネーター(小学校区相当の地区に1人を配置)、ボランティアセンターに配置された倉敷市リエゾンと協力して、真備内の支援拠点(地区の公民館分館など)を通じて支援調整を行っていました。2019年度が始まるにあたり、ボランティアセンターが縮小され、外部支援者の撤退も相次ぐ中、支援を続ける団体や、真備の地域自治組織などの活動を支援するため、2019年5月7日に災害支援ネットワークおかやま(事務局：岡山NPOセンター)とピースボート災害支援センターが共同で開所した施設が「まび復興ボランティア団体・NPOシェアオフィス(通称：まびシェア)」です。

### 被災直後の様子

真備は被害の大きさもさることながら



72時間の積算降水量の分布図 (山口大学山本晴彦研究室)

- ・被災の状況が広く報道で取り扱われたこと
- ・土砂災害と違い一般のボランティアさんが活動しやすい状況だったこと
- ・交通の便が良かったこと

などが重なり、一般ボランティアの活動者数が多く、平均して1日100人が4ヶ月に渡り連日活動いただきました。また、広域の災害支援のプロボノの団体も多く入っていました。

当初一番苦労したのは、熱中症対策と、破傷風などの感染予防です。住民、ボランティア共に熱中症で死者を出さないため（大げさではなく本当に危険な状況でした）、現地では衛生環境も劣悪だったために感染症にならないような支援も必要でした。当初3人配置したスタッフのうちの1人は、看護師で災害ボランティアセンター内に「救護班」を立ち上げ、医療系の専門ボランティアを募り、水をもって、自転車で被災地を回りながら熱中症への注意を呼びかけると共に、在宅避難者で気になるお宅の把握と、見守りなども行っていました。人口2万人のまちのほぼ全体が浸水したこともあり、地区内の避難所では対応がしきれず、真備から離れた小学校や、隣接した総社市で避難生活を送る人たちも多くいらっしゃいました。避難所にも多様な支援組織が入り、炊き出しや、こどもの学習支援などが行われていました。

真備に隣接した地域の学童保育では、お家の片付けの間のこどもの居場所支援が行われた他、乳幼児の預かり支援をした団体もありました。

総じて、発災から2週間程度で様々な支援が形作られ、わたしたちは各支援組織の資金調達のコーディネートや、スマートサプライなどを使った物資調達のご支援をさせていただきました。

### 真備はもともと地域活動が活発な地域

真備では、倉敷市との合併前から市民活動が盛んで、まちづくり協議会が組織されておりイベントだけでなく課題解決型の取り組みをしている地域も多くありました。また、地区社会福祉協議会などの地域組織、民生委員や愛育委員の活動な

ども活発です。人口構成の違いや、新興住宅地の有無など、地区によって色合いは変わりますが、外から入って見ていると多彩な地域の担い手の多いまちと言えると思います。

また、発災前より真備連絡会\*という福祉事業者を中心とした連絡会が7年前から開催されていました。発災1ヶ月後の8月には再開し、情報交換をつづけながら、次に起こる災害への備えを進められています。現在は、災害対応のふりかえり検証をしつつ、事業所と支援機関の連携を進め、命を助けるための避難行動を計画しています。自主避難所を設定して台風等で避難勧告がでた際に実施、検証なども重ねてきています。この連絡会は、まびシェアを会場として使っていただいています。

現在、市や医師会とも協働してBCP\*（Business Continuity Plan、事業継続計画）策定のための勉強会をまび記念病院で1カ月に1回開催しています。

\*BCP：災害などの緊急事態が発生したときに、損害を最小限に抑え、事業の継続や復旧を図るための計画。もともとは企業対象の用語だったが広範な組織に当てはめて使われるようになった。

### 特殊ニーズについて

食物アレルギーやアトピー性皮膚炎のみなさんは、支給されるお弁当などが食べられないことが多く、自分たちで調達されていたことを耳にしています。高血圧の事例もたくさん聞かれていたため、避難所や地域の炊き出しでは、アレルギー対応や、野菜不足などに配慮したメニュー設定をいただける支援組織が多くありました。

発達障害の児童や引きこもりを対象とした放課後デイサービス「ホハル」は発災1ヶ月後に再建を果たし、こどもの預かりを始めていました。地域のお母さんたちの炊き出し支援から発足した「川辺復興プロジェクトあるく」、「呉妹を元気にする会」、「サンサポートオカヤマ」障がい児の親を対象とした「ペアレントサポート・ステッ

プ」など、子どもと子育て世代を対象に活動している団体が複数あり、子育てをする世代同士での共助的な支援が多く生まれ、今も活動を続けています。

食物アレルギーや障がいをもった家族のいる世帯は避難所に行くことを躊躇され、様々な伝手をたどって自主避難されていましたが、発災時は、ペットを飼っていた人が避難所に行けなかったという話も聞きました。

現地雇用をしたまびシェアスタッフは、被災していても柔軟剤やガムテープなどの匂いで体調が悪くなる化学物質過敏症があるため避難所には行けず、知人を頼って避難生活を送っていました。災害支援ネットワークおかやまでは、体育館を避難所にすること自体の見直しも視野に、避難所の選定・設定や運営などを部会で検討予定です。

### 高齢者の様子

当初、薬が無いという声は常にあり、発災直後から2週間に渡って今まで処方されていた薬を飲んでいないという人も多くいらっしゃいました。複数の薬を飲みやすいように一包化して処方箋薬局から出してもらっていたのに避難所での巡回診療ではバラでしかもらえないとか、避難所から行ける病院が分からなかったり、どこの病院が診療を再開しているのかわからない、といった相談事もありました。しばらく病院に行けてないという人が多かったのは最初の2週間あたりまでだったと思います。そういった課題を解決するために病院の情報を一覧表にして避難所や在宅避難している人に配布しました。

当初の混乱した生活から、9月に入ると支援物資を分けたり、避難所運営などの作業がひと段落し、自宅の片付けも目処が立ち、少し生活が落ち着いてきたところに体調を崩す人がバタバタと出てきたと思います。

最後まで残った避難所は12月までありました。年末年始に体調を崩して入院した人、年を越し

て亡くられる方もたくさんいらっしゃいました。年末年始に避難所を回っていた頃、災害と持病の関連はわからないのですが、入院に至る人が多かったという印象があります。「年越し」は気持ちの中で何かふっと力が抜けてしまうところがあるのではないかと思いました。

### 支援連携について

前述の通り、発災直後から倉敷市災害ボランティアセンターへ職員派遣を行い、社協の生活支援コーディネーターのみなさんと地域拠点へのご支援を行いました。

8月後半から災害支援ネットワークおかやま@くらしき会議（情報共有会議）も設置し、真備の支援に取り組む民間組織、社協、行政のみなさんの情報共有をするとともに、支援調整を行っています。

また地域では、地域包括センターが主導し、少地域ケア会議が行われています。そこに支援機関として社協、真備保健推進室、倉敷市市民活動推進課とともにオブザーバーとして参加し、地域の状況を把握し、中間支援組織としてご支援できる場所を担っています。川辺地区では99%が被災しましたが若い世代も多く、川辺の小地域ケア会議から「かわべ未来ミーティング」というプロジェクトが立ち上がりました。これからどんな地域にしていくかという話し合いの場のファシリテーションをさせていただいたことをきっかけに、地域の再建にむけたご支援へとつないでいます。

また、災害支援ネットワークおかやま@くらしき会議参加組織有志で、「晴れの国助け合いプロジェクト」を始動。倉敷市社会福祉協議会真備事務所、倉敷市真備支え合いセンターと協力して、公的支援の狭間になっている困りごとのご支援や、地域コミュニティの再建の支援などに取り組んでいます。

### 市民活動と防災

主には各地区のまちづくり推進協議会が中心と

なり防災の動きが始まっています。箭田地区では、毎週金曜日に防災研究会が開かれて河川の決壊などの検証がされていたり、毎月6日に近い週末に伐採された河原を再び樹林化させないためのイベントなどが行われています。また川辺地区ではこれからの災害に備えて地区防災計画をつくる前に、地域状況を把握するための「帰ってきた人マップ」がつけられ避難に助けが必要な世帯の情報を把握していく取り組みや、マイタイムラインのワークショップ、多様なケースを検討するための調査と共有なども「かわべ未来ミーティング」の中で行われています。また、岡田地区ではアンケートを元に検証を重ね、「逃げる」を作成。これを用いたワークショップを開催しています。地元の人々が主体的に動く中、まびシェアは人と人をつなぐ場になっています。地元の人だけで集会を開く場合、ややこしい人間関係ゆえに難しいところもあるかもしれませんが、よそもの私たちが入ることで交通整理できることもあります。また資金調達のコーディネーションや、デザインや編集などの技術者の接続。会議体の議事録作成支援なども行っています。

\*真備連絡会（司式名称：真備地区関係機関・事業所連絡会）：介護系の事業所や病院、行政支援機関等が参加して定期的に行っている会議体、要援助者の防災について取り組んでいる。真備以外から仕事として通ってきている若い世代もいる。

\*まちづくり推進協議会：7つの地域でそれぞれに行っていて、リタイアした方たちが活動の中心を担っている。発災前から活動していた。服部まちづくり協議会は発災前に既に要支援者のリストアップができていてニーズの聞き取り結果を台帳に作り上げていた。

\*高齢者支援センター：2019年度まで地域包括センターを受託して小地域ケア会議を実施してきた。（2020年度より別事業者に移行）。その他、訪問介護、デイケアサービス、ショートステイ、預かりサービスなどを担っている。

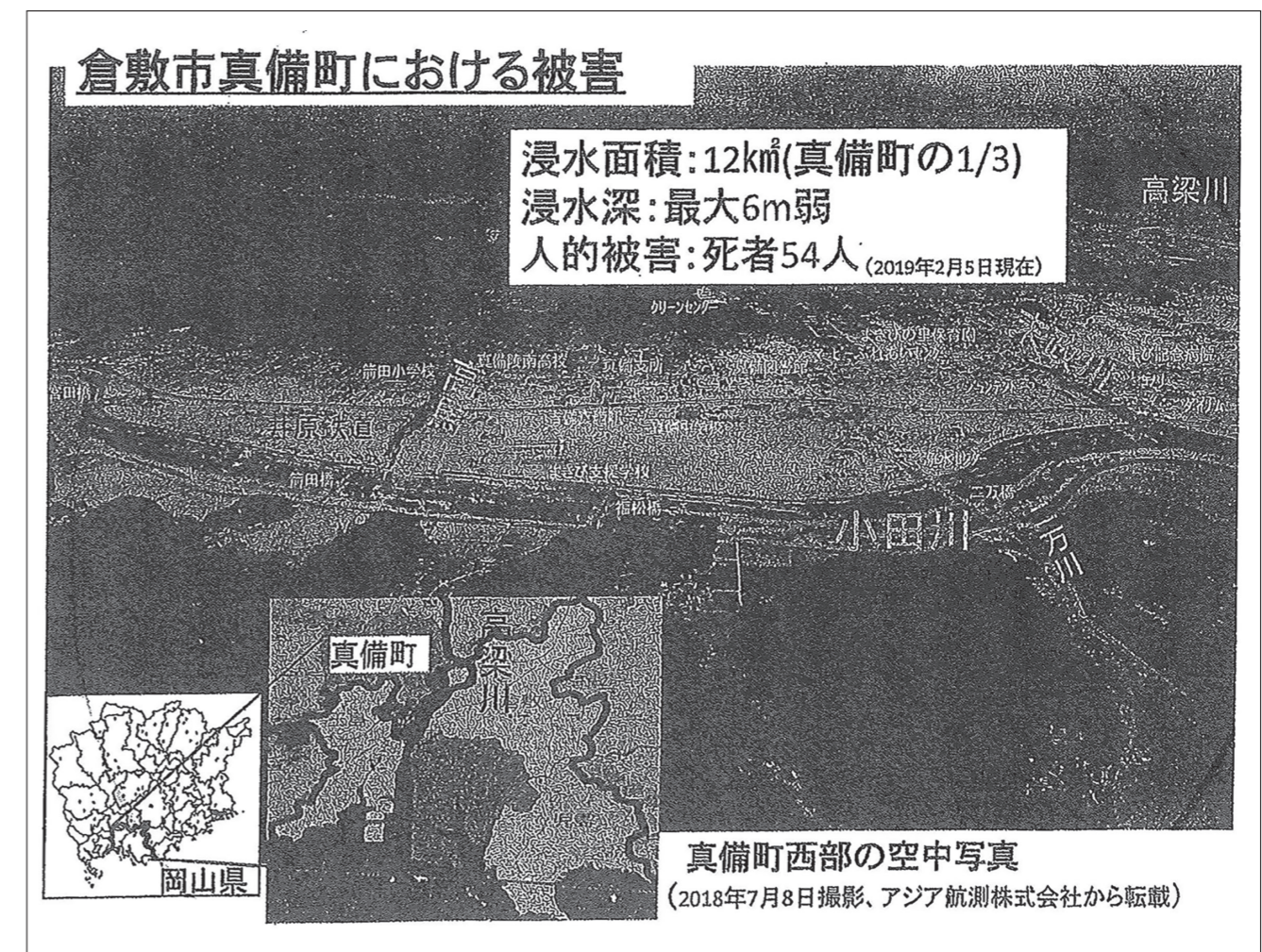
\*小地域ケア会議

高齢者支援分野の人たちが参加し、要支援者にどのような働きかけをしたら住みやすい町になるかをテーマに活動している。どこの地域も要支援者をどうやって避難させるかという話になりがちのところもあるが充実した議論ができています。もともとは「買い物に行けない」「移動が難しい」「農作業を今年からは出来なくなった」というような高齢になると必ず突き当たる課題を解決して高齢者が住みやすい町を作るにはどうしたらいいかというのが小地域ケア会議のテーマ。3カ月に1回会議をしている。水害の後に復活しているところは、服部、二万、園、川辺の4か所。

### 倉敷市の社会福祉協議会

復旧期の真備において機能したのは各小学校区に配置された社協の生活支援コーディネーターの存在でした。ボランティアセンター立ち上げと同時に倉敷市全域から真備地域に投入され、ボランティアセンターの運営が落ち着いた頃から、各地域で公民館分館を拠点とした物資支援や、状況把握、住民さんとの協力によるサロン活動支援などを行いました。シーズ班の支援調整の際のニーズ把握などでは連携して、地域にフィットした支援を行えたのではないかと思います。

まだまだ通常は10万人に1人程度の配置が通常でコーディネートとして機能しきらないという状況が見受けられますが、今回の災害で小学校区に1人の地域のコーディネーターが配置されることで、住民主導での活動に外部の支援をコーディネートし、主体的な復旧復興活動の基盤を作れたのではないかと思います。



倉敷市真備町における被害（山口大学山本晴彦研究室）

## 〈資料6〉

### 災害支援報告(2018.8~11) 西日本豪雨(岡山県倉敷市真備町)

認定NPO法人アトピッ子地球の子ネットワーク



### 支援開始の背景(1)

- 8月に保健師から連絡が入る  
「豪雨による水害発生当初に1度大量に病院に物資が届いたが、それ以降の支援はない状態におかれている。当初送られたカレーとふりかけはとても助かったが、大量で同じものをずっと食べ続けているが当分減らない、患者が避難所で食生活が維持できるよう助けてほしい」
- 保健師に会いに行き、患者の状況などについて話し合い、食物アレルギーの人に対しては、患者数に見合った継続的支援が必要という結論に至った。

NPO法人アトピッ子地球の子ネットワーク

2

### 支援開始の背景(2)

- 私たちが豪雨発生後に患者数の推計をしたところ、真備地区という限られた地域についてだが、患者数は児童生徒で25人という推計になった。  
(近隣地域で水没したところの推計は入っていない)
- 保健師、医師、地域の福祉施設関係者等の聞き取りや話し合いからも、推計がさほど遠い数字ではないことが明らかとなった。

NPO法人アトピッ子地球の子ネットワーク

3

### 被災地の状況

- 水没地域は建物が残り、家の中は文字通り空っぽの状態。壁紙すら残っていない。数十軒の中に1軒くらいは2階が浸水しておらず人が住んでいる。
- 真備地区の公立保育園は食物アレルギー患者はいるが支援を受けるには市の許可が必要という状況。
- 私立保育園は支援が届いていない。当初大量に届けられたカレーとふりかけが減っていない(子どもが同じものを1カ月継続して繰り返し食べることは困難)
- 給食設備が1階にあったため、2階で通常の保育をしているが給食が提供できない。11月に工事完成予定。
- 大人が泥のかき出しや家財道具の廃棄などをする間、子どもたちの居場所がないため、2カ所の公民館に仮保育施設が作られた。被災した私立保育園がもらった食糧を借り施設に届けている状態。

NPO法人アトピッ子地球の子ネットワーク

4



## 家屋、地域写真



NPO法人アトピッ子地球の子ネットワーク

5

## 倉敷市真備地域の支援の形

- 避難所、行政の借り上げ施設にいる食物アレルギーの人に加熱せずに食べられる食品を2週間に1度届ける。
- 私立保育園(在園児150人、その内食物アレルギーがある子7人)の給食支援をする。食物アレルギーの子どもだけ食べ物があっても他の園児に給食がない状態では実質的に患者支援ができないため、全園児の給食支援をおこなうことになった。
- 牛乳を飲んでいないことを保育園職員が非常に心配しており、牛乳提供の要請があった。
- 野菜をほとんど食べることができていない。育ちざかりの子の野菜不足の解消の一助に野菜ジュースの提供要請があった。

NPO法人アトピッ子地球の子ネットワーク

7



NPO法人アトピッ子地球の子ネットワーク

6

## 時間経過と共に変化する要請

- 避難所、仮設住宅(プレハブ住宅、トレーラーハウスなど)借り上げ施設(ホテル、アパートなど)へ移動するたびに生活環境が変わる(必要なものが変化する)
- 手荒れしない石けん、スキンケア用品
- 加熱しなくて食べられるものから加熱して食べるものへ一部移行している。まだ非加熱のものも必要。  
母子家庭、母親が寝込んだ、夏からずっと神経を張ってきて疲れている、などの状況。
- こどもがよく熱を出す、インフルエンザ対策が必要といった声があり、家から細かいものを持ち出せていないという実情を踏まえ、救急箱を届けることになった。

NPO法人アトピッ子地球の子ネットワーク

8



NPO法人アトピッ子地球の子ネットワーク

プロジェクトメンバー

- 木村彰宏（（一社）兵庫小児アレルギー研究会）
- 吉澤淳、赤城智美（認定NPO法人アトピッ子地球の子ネットワーク）
- 今村慎太郎（NPO法人アレルギーっこパパの会）
- 江崎礼子、岩崎未峰（株式会社ソノリテ）